

Title	「ニヤウンヤン王朝時代」：第二次インワ王朝
Author(s)	服部, 正一
Citation	大阪外国語大学学報. 32 p.21-p.40
Issue Date	1974-03-25
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80528
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

「ニヤウンヤン王朝時代」

～ 第二次インワ王朝 ～

服 部 正 一

“The Period of Nyaung:yan: Dynasty”

(The Second In:wa Dynasty)

by Masaichi Hattori

နိဒါန်း

န မောတဿာ ဂဝ တောအရဟ တောသမ္ဘာသ မ္ဗဒ္ဓဿ

ဤဆောင်းပါးသည် ပြင်ပလူသိသည့်အချက်အလက်များမှာ မြန်မာဘုရင်မင်းများ၏ နေပြည်တော်ကို တောင်ငူမှသည် အောက်မြန်မာရှိပဲခူးမြို့သို့ ရွှေပြောင်ပြေးသွားခြင်းနှင့် နောက်တဖန်အညာမြန်မာရှိအင်းဝမြို့တော်သို့ အတည်တကျ ရွှေပြောင်ပြန်လည်အတောအတွင်း ခြွေမြန်မာလူမျိုးတို့အား တခြားသောလူမျိုးအမျိုးမျိုးတို့ကမည်သို့ မည်ပုံပုန်ကန်ကြရိုင်း၊ ပြစ်ဒဏ်ခံရခြင်းအကြောင်း၊ မြန်မာလူမျိုးတို့ကဥရောပတိုက်သားများနှင့် ကူးသန်းရောင်းဝယ်ရာ၌မည်သို့ စီမံဆောင်ရွက်ကြောင်း၊ မြန်မာနန်းတွင်း၌ဖြစ်ပေါ်ခဲ့သော ပေါ်ပေါက်ခဲ့သော အရှက်အဓွေး အမှုအခင်းအကြောင်း အရာများ၊ တပင်ရွှေထီးမင်းနှင့်ဘုရင်နောင်မင်းကဲ့သို့ သောဘုရင်မင်းမြတ်များ စေတီအစိုက်တည်းကတဖြည်းဖြည်းတစ်ခုချင်း ယုတ်ညံ့လာ၍ ဂုဏ်သိမ်ငယ်သောမင်းတို့၏အုပ်ချုပ်မှုအလွဲအချော်များ၊ နောက်ဆုံး၌ အင်းဝမင်းဆက်ပျက်စီးခြင်းသို့ ရောက်သွားသောလမ်းကြောင်း၊ ထိုအချိန်တွင် ခြွေအရင်ပထမအင်းဝစေတီဖြစ်ပေါ်ထွန်းကားခဲ့သော မြန်မာကဗျာလင်္ကာစာပေသည်မူ နောက်တကြိမ်ပေါ်ထွန်းလာသည်၏ အကြောင်း စသည်ဖြင့် ဆယ်ခြောက်ရာစုအလယ်မှဆယ်ရှစ်ရာစုအလယ်အထိ မြန်မာလူမျိုးများ၏ သမိုင်း ယဉ်ကျေးမှုအစဉ်အလာကို ရေးသားဖော်ပြသွားမည်ဖြစ်ပါကြောင်း။

まえがき

ビルマ王家の首都がタウンゲーより下ビルマへ、そしてまた上ビルマへ移る頃のビルマ族に対する諸民族、諸種族の反抗運動、外国貿易に対するビルマ人の政策、ビルマ官廷内の諸事情、タビン・シユエティ及びバイン・ナウンの二大王の盛時をピークとしてビルマ歴代王の相次ぐ失政、遂にはインワ王朝の滅亡に至る過程、その間、第一次インワ王朝時代に栄えたビルマ文学が第二次インワ時代に再び開花期を迎える、等々16世紀中葉より18世紀中葉に至る間のビルマ人のたどった栄枯盛衰の文化を描く。

ニヤウンヤン王朝時代（1550年頃より1752年まで）
（タウンゲー時代後半より第二次インワ王朝の滅亡まで）

第二次インワ王朝の建設

Nyaung: Yan: 王（1597～1605）

ハントワデイ国が亡び、ナンダバインが没する二年前には国は乱れて、ナンダ・バインの弟で、当時、ニヤウンヤンの太守であった ミン イエー ヤンダ メイ（Min: ye-Yanda-meit）がニヤウンヤン ミン タヤー（Nyang: Yan: Min: tayā:）を名乗って1597年王位に即き、インワの旧都へ移り、占星術師 バーメ（Bā: mè），バー タモー（Bā: tamaw）の二人と相談し、都を再び建て直した。これが第二次インワ王朝の始まりであり、第一次インワ王朝の創設者タドー・ミンビヤーから数えて21代目に当るのである。

彼は一連の予備遠征として、モーガウン、モーニン、バーモ、モーネ、ヤウンフウエ、センウイ等のシャン諸州を服従させた。しかし、センウイよりの帰途、1605年に彼はこの世を去り、その子アナウ・ベツルンに彼の事業の継続を委任した。

Anauk-hpet-lun（アナウ ベツ ルン、本名＝Mahā Dhammayaza, 1605～1628）

その後、ニヤウンヤン王の子アナウベツルンが王位を継ぎ、ニヤウンヤン王が果せなかったビルマ国統一に着手し、先づ破壊された下ビルマ一帯を獲得し、更にタイ国北方のジンメをも合併した。しかし、その時、プロームとタウンゲーは得られなかった。

その後、アナウベツルンは1607年プロームを攻略して、それを併合したが、その時、敗残のプロームの王は一人王座に端坐して死を待っていたが、ンガテインゲ（Nga-htin-ge）という13才になる一人の小姓のみは王の側を去らず、最後まで攻め込んでくる敵に向かって奮戦した。この少年の伯父に当る Thūbaya Gāmani は Nga-htin に、「汝は若者としてりっぱであるが、もはやプロームの都は陥落したのだから、降服せよ」と言って、彼に武器を捨てさせた。アナウベツルンはこの少年を捕えて自分に任せさせた。この少年こそ後に大臣となりウンデーナンダヨルダー（Nanda yōdhā）の号によって功成り名遂げたビルマ英傑の前身であった。

アナウベツルン王がプロームを占領した時、王は、「一名の僧と一名の人を得た」と云ったが、

それはタウン ビーラー (Taung-bilā) という僧学者とこの少年 Nga-htin を指すのである。
(Taung bilā については後述する)

プローム占領後、1610年にアナウベツルン王は兄に当るタウンゲー王ナッシン・ナウンを攻撃した。ナッシン・ナウンは反撃しようとしたけれども敗れ、アナウベツルンはタウンゲーを陥れ、セイロン請来の仏歯とエメラルド製の托鉢、その他多くの家畜と共に捕虜（その中にはペゲー、プローム、インワ等より移された者も含まれていた）をインワに連れ去り、ナッシン・ナウンをタウンゲーの太守としてそこに残した。タウンゲーの太守ナッシン・ナウンに関連して、すでに学報29号318頁にてふれたポルトガル人デ・ブリートについて述べる必要がある。

Felipe de Brito

フィリプ・デ・ブリートはもと商船の給仕であったが、のちアラカン王宮に王僕として仕え、王の寵愛を得た。王は彼をシリアムに派遣して税関を管理せしめると共に、同地のポルトガル人に対しては王の代理人として臨ましめた。当時シリアムはアラカン守備兵の将の統治下にあったが、デ・ブリートはやがて自らシリアムに主たらむとの非望を懐くに至った。

ポルトガル人 De Brito (ビルマ名 Ngazingā) はかねてシリアムに独立を宣言し、そこを拠点として100名ほどのポルトガル人、数名の黒人、インド人奴隷、それに集ってきたタライン族等を擁していた。彼はまた数隻の小船をして沿岸を巡航せしめ、シリアム以外の地に商船の来港することを妨げた。というのは、彼はシリアムにて商船から関税を徴収することができ、輸入はすべてここで行わせることにしたかったからである。ゴアのポルトガル総督も彼の敏腕を知って彼にポルトガルの軍隊と船艦をあたえ、遂に彼を正式にシリアム太守として認め、彼の姪との結婚を許した。

アラカン軍とタライン軍はシリアムを包囲したが、彼らはデ・ブリートがゴアより得た軍隊と船艦によって撃退された。タライン軍はデ・ブリートに屈服し、またデ・ブリートはアラカン王によって王と同等に扱われた。しかしアラカン王はタウンゲーのナッシン・ナウンと同盟し、彼の息子ミンカマウンを大船隊と陸上部隊の先頭に立てて、シリアムを攻撃した。アラカン軍は破れ、ミンカマウンは捕虜になった。その後もデ・ブリートに対して大遠征隊が組織されたが、失敗に終わった。そこで1604年平和条約が結ばれた結果、ミンカマウンは巨額の身代金を支払わされて自由になった。そしてアラカンとタウンゲーの軍隊は撤退した。ナッシン・ナウンとゴアの総督はデ・ブリートの同盟者となった。

デ・ブリートは依然として彼の独断専行を改めず、数名のビルマ史家の記述を総合すれば、バイン・ナウン王が建立した多くのパゴダを破壊し、仏教僧を虐待虐殺したり、またある時は強制的に彼らを選俗せしめ、聖像の黄金を剥いで、巡礼者に売りつけたり、パゴダの青銅の風鐸を融かして、大砲を造るための青銅材とした。また、パゴダに埋められてあった宝石を取り出すことによって神聖を潰した。また、タライン族を強制的にキリスト教に改宗させた。なおビルマ王家に属する者を獄舎につなぎ、くし刺しの刑に処した。このような行為は結局彼の滅亡の主な原因となったのである。

De Brito と Nat-shin Naung の最後

1612年にシリアムを支配していたデ・ブリートはマルタバンの太守 Binnyā: Dala と連合して、タウンゲーを占領し、戦利品と共にナッシン・ナウンをシリアムへ連れ去った。それを知ったアナウペツルン王は水陸両路よりシリアムを攻撃したが、それまで連戦連勝に驕ったデ・ブリートは油断をして火薬を切らしていた。しかし、シリアムの防備は固く、来襲してくるアナウペツルンの1万2千の兵に熱油を浴びせて撃退した。しかし、かねてよりテ・ブリートに対して不満を抱いていたタライン族は夜ひそかにビルマ軍を城内に導いた。かくして3ヶ月の戦闘の後、シリアムを陥し入れることができた。その時、ナッシン・ナウンはすでにデ・ブリートと *血盟を以て結合し、死を共にすることを誓い合っていた。

*血盟 (Thwē:-thauk) とは That-pon Abhidhān, P. 689によれば、

” သွေး နီး သဘး ချင်း မှတပါးလူတို့ဝေးပါသည့်အစိတည်း လက်မေဘင်း သွေး
တို့ဖော်စုတည်း သေဘက်ခြင်း ဖြင့်သွေးဝည်း သည်၊ အတိုမျိုး ရှိသောလည်း
၈၃: ” (၉)

(血縁者以外の者が加わって契いを結ぶ時には互いに腕の血脈を切ってその血を飲み合うことによって血盟する) と書かれてあり、Judson's Bur-Eng Dict., P. 1050ではカレン族の習慣より由来しているとある。

アナウペツルンはナッシン・ナウンの引渡しを条件としてデ・ブリートに和解を申し入れたが、彼はそれに応ぜず、二人共死を決意した。アナウペツルン王は遂に従兄弟に当るナッシン・ナウンを処刑しなければならなかった。ここにおいてタウンゲー王家は亡びた。

ナッシン・ナウンは詩作の分野においてビルマ文学史上有名な人物である。(後述する)

シリアムが陥落したので下ビルマ全土はアナウペツルン王に服した。このようにして、彼はポルトガル人の侵略をビルマよりくい止めることができた。デ・ブリートはその子 Simon を含めて冒瀆の罪に問われ、*串刺刑に処せられて、二日間曝された。急をきいて来援したポルトガル船数隻がシリアムに着いた時、シリアムはすでに陥落してしまっていることを知って、そのまま引き返した。デ・ブリートの家族や混血児を含めて約500名のポルトガル人は捕虜奴隷として大部分はシュエボ地方にまた数名はサガイン地方のパインマに移されたが、後チンドウインとムー両河間の村落に分散居住せしめられた。それらの村々は彼らに因んで *Baringyi 村と呼ばれ、その村人らは代々王の砲兵として使用された。その後もビルマ軍は白人を捕虜にする毎に彼らをバリンデー村に送り、その後1757年にはフランス人が多数捕虜となって彼らの中に加えられた。漸次その数を増し、1800年頃にはその子孫は2千人に及んだ、と云われている。彼らの子孫は(私の在緬中) ミンムー、ミヤウン、チャウンウ寺の地方に住み、ビルマ人と同じ服装をし、ビルマ語を話しているが、彼らはカトリック信者である。

*「ビルマにおける串刺刑について」は荻原弘明氏「東南アジア——歴史と文化——」No. 1, 1971の134頁参照。

*Baringyi は一般白人を呼ぶのに用いられるが、Judson, P. 685によれば、(a corruption of Feringhi) a Portuguese, or descendant of a Portuguese; a Roman Catholic. “There is no doubt that it is the

name Franki, slightly corrupted, which from the days of the Crusades has been used all over Asia by the Mussulmans, to indicate Christians in general. During the campaigns in Afghanistan the English were called Feringhis by the natives of the country.” Bigandet.

アナウペツルンはなおテナセリムの奪取を試みたがタイ国軍のために撃退されて甚大なる損害を蒙った。しかし、彼は南はチエンマイ及びモールメイン地方に至るまでの支配権を回復した。

デ・ブリートが亡びてから、アナウペツルンは4年を費してバイン・ナウンが建設した王国を再度征服し、ペグーの町を再建して、彼の首都とした。1616年より1628年まで彼は平和のうちに統治した。

アナウペツルン王の事業

人民はアナウペツルン王について、ハーヴィも述べている（P 115）如く、「我が王の宝刀一閃、よく潮流を沮む」と云って、喜び、且つ恐れた。しかし、彼には柔和な一面もあって、ペグーの王宮の外部に一つの鐘を吊り、これにビルマ語とモン語にて「悩みある者来たりて、この鐘を鳴らせ、余はその悩みを聴かむ」という意味の銘を刻んだ。この鐘は王の没後、数年を経て、アラカン軍がペグーを攻略した際にアラカンへ持ち去られた。1824～26年の第一次英緬戦争中、この鐘は古都の寺院の境内にて発見され、非正規騎兵の一ヒンズー教徒の士官によって戦利品としてインドへ持ち去られた。それは現在ジラー・アリガーのヒンズー教の寺院に懸けられてある。（Journal of Asiatic Society of Bengal, vol. vii, P. 287）

アナウペツルン王は諸々の種族、ビルマ、シヤン、モン等より彼の部下を選び、国民に彼らが抱いていた不満を訴えることを許した。また、彼はインドに駐在せるポルトガル人たちと同様にインドの王族とも親密にした。貿易が奨励され、シリアム、プローム、インワ、バーモ等にはイギリスの貿易取引所が設けられた。そして、また諸外国の商人たちにも貿易の機会を与えて、商業を盛んにした。

アナウペツルン王の最後

彼はその子 Min: yèdeippa（ミンイエーディッパ）が後宮の一人 Hnin: hkan: paw（フニンカンポー）と密通せることを探知し、「その罪正に鉄釜刑に値いす」と言って息子を威嚇したところ、ミンイエーディッパは本当にその刑の宣告が下されたものと速断し、仲間を集めて一夜父王の寝殿に入り父を殺害した。（パガン時代の Narathū, プロームの領主 Thihathū 等の行為が想起される。）

アナウペツルン王がその息子ミンイエーディッパによって殺害されたのは1628年で、ペグーの河の西岸にて行われた。それ故、アナウペツルン（Anauk-pet-lun, 「西側にて死す」の意）として今日まで知られてきたのである。本名は Maha Dhammayaza と呼ばれた。

Thālun-min:（タールン王 別名 Thado Dhamma Yāza, 1629～1648）

父王を殺害したミンイエーディッパはハンタワデイを支配していたが、彼は父王と身分の賤し

い女性との間に生れたという理由で、大臣高官たちは彼を王と認めることに反対であった。アナウペツルン王の弟、即ち、ミンイエーディッパの叔父に当たるタールンはシヤン諸州の遠征中であったが、王の計報を耳にするや、先づ上ビルマを平定し、ペグーの親兵中の上ビルマ隊の家族を捕え、この事実をペグーに知らしめ、ミンイエーディッパに対するその親兵たちの忠勤を動揺せしめた。しかし、ミンイエーディッパにはこの叔父に対抗する勇氣はなく、アラカンに走ろうとした。彼の怯懦と専横を憤って、彼の部下たちは彼を捕え、使者をインワに送ってタールンの即位を求めた。タールンはこの要求を入れ、ペグーに到着するや、落飾して仏門に入ることを許してもらいたいと乞うミンイエーディッパの哀願をしりぞけて彼を処刑し、王位に即いた。彼は1635年都をインワに移し、それまで疲弊していた国民は平安をとり戻し、国は平和に栄えてきた。インワはそれ以後、ニヤウンヤン王朝の滅亡（1752年）に至るまでビルマの都として存続した。

タールン王が首都をペグーよりインワへ移した理由として考えられることは次の事情によるものと察せられる。

タールン王が先王たちと政策上相異していた点はタイ国との戦いを避け、国の平和と安定を計ることであった。ビルマ人的な観察よりすれば、当時のペグーはタイ国を攻撃する根拠地としての首都以外には利益は少なかった。というのは1600年頃までにペグーはイラワディー河の沈泥のため海港としては役に立たなくなっていた。そして、シリアムの都がそれに取って代ろうとしており、多くの点でインワよりも一そうすぐれた都と考えられたであろう。しかし、モン族はその都には愛想をつかし、三角州地帯では人口が著しく減少していたし、他国からの攻撃に曝されていた。なおその上、当時のビルマ王は諸外国との交流の価値について真の理解をもっていなかった。

結局ビルマ宮廷はモン族との連合を捨てて、ビルマ族の故地である上ビルマに踞蹠してしまったが、それはビルマ王国後退の一步であり、伝統主義への屈服であった。上ビルマにとち込もることによって外界との接触より遮断されたビルマ諸王は彼らの宮廷が宇宙の中心であり、バゴダを建立したり、属国より美姫を集めたり、白象や奴隸の獲得のために隣国を侵略すること等が王としての治国策であると信ずるようになった。その次の世紀にタイ国はその首都を撤退することを余儀なくされた時に、国内の奥地よりも海港に首都を建設したことが独立国として余命を保ったのに対してビルマは外国支配に屈してしまった、という結果を招くに至った。

Hall (P. 66) は云う。ビルマ王国失敗の主な要素は西洋帝国主義の侵略によってもたらされたのではなく、インワ宮廷が自ら招いた外国人嫌いと外国人との非妥協策によってである。

彼の無啓発な保守性は進歩の敵である無効果な安定性を促進させた。

オランダ及びイギリスの東インド会社がビルマに彼らの最初の工場を設立したのはタールン王の時代であった。Hall (P. 67) によれば、1635年の9月に王はオランダ国の代理者としてDirck SteuerとWiert Jansen Poptaを彼の新首都に迎え、彼の宮廷にて踊りや剣舞を披露した。彼らの報告によれば、彼の宮廷は優雅であり、公式招待において、彼は一言も発せず王座にほとんど二時間座したままであったということである。

王の本名はThado Dhamma yāzaであるが、ビルマ史家は通例Thālunと呼んでいるが、

それは彼が父王から受け継いだ領土を拡大したからである。 ဘဲဝှံး (ဝှံး) = to go

beyond, to exceed) しかし、それはビルマの富と勢力が及んでいた地域においてではなく、遠く離れたシャン州においてであった。

タールン王の業績

タビン・シュエティ王の時代よりアナウ・ベッルン王の時代まで続いた約百年間幾度にも渡る戦争のため人口が著しく減少していた。国の繁栄は人口の充実の上に基礎づけられるものであると考えたタールン王は人口の増加を計った。そこで、国中の妻を失った者や夫を失った婦人家屋を破壊された者には住家を建築して与え、また、年頃に達した男女には、それぞれの後見人を立てて早く結婚させるようにした。そして、この命令に従うように国民たちに徹底させた。

また、国の経済開発のために運河やクリークを修理させたが、その手初めとして米倉地帯であるチャウセの運河を復旧させ、戦争の捕虜をその工事に使役させた。また、彼らを奴隷として扱わず、小作農としてチャウセに定住せしめ、水道開発の労役に服する一方、兵としても仕えさせた。このようにして、田畑の灌漑を改良して、農作物の収穫を豊かにした。その他、貧しい人々の田畑にも河川を利用して灌漑の便を計るために各地方より援助を要請した。かくして、漸次経済発展を高めていった。そして、国をより豊かにするため経済政策を国民たちに理解させようと努力した。

王は庶民や宮廷人の生活を詳細な点にまで心を用い、自身でよく調査した。その例として、ウ・ティンウ (P. 153~4) は次のように述べている。

ある時、王は婦人が米を炊く時に沸騰している米水を道端へ無駄に注ぐ(ビルマ人のご飯の炊き方)のを見て、その米水を飢えている子供たちや小犬にまで食べさせ、栄養になる米の部分浪费了捨てるのを訓めた。

また、高価なモスリン生地を着ていた宮廷の婦人たちが平気で汚れた柱にもたれているのを見て、王は宮廷に仕える婦人たちにそれらの衣服は国民の税金にて買ったものであるから、もっと大切にするように命じた。そして、国の財産を浪費する宮廷人を責め、3日間、口をきかなかった、という。

タールン王の最大の事業は村落及び地方行政を再興し、国税管理を調査したことである。彼の指図のもとに1638年の税收調査が行われ、租税土地台帳が編纂されたが、それはこの種の記録としてはビルマでは最初のものであると、云われている。しかし、不幸にもそれは現存しておらず、それについて知られているすべてのことはボードーパヤー王の時代に計画された後世の編纂物のうちで、それに言及したものであって、村民の数、耕地の面積、納税の金額等々に関して正確に具申したところを収録したものであろう。

王の大臣 Kaingsa はビルマ語で書かれた最初の法典 Manusarashwemin (別名 Mahāyāza dhammathat) を編纂した。従来のはパーリ語で書かれたものである。それはバインナウンの編纂になる法典と、古代モン語にて書かれた法典に負う所が多いが、モン法典が基礎としたインド法の精神に代うるにビルマ法の精神をもってしたものである。

タールン王は国の経済発展に尽したのみでなく、宗教面にも大いに力を入れた。彼は1636年にセイロンの一塔に模してサガインに Kaung-hmu-daw(カウンフムドー、別名, Yāza Muni Sula)パゴダを建立し、セイロン伝来の仏牙及び石鉢を安置し、チエンマイその他で捕虜にしたシャン族の奴隷をここに奉納した。王はパゴダを完成したが、傘を奉納しなかった。その理由は、ウ・ボチャ(P.186~7)によれば、1648年に傘を献納するに適当な時期を尋ね求めた時に、タウンゲーより来たった占星術師 Lokuttarā 師僧は傘を奉納するのをその子の時代になってから為すようにと指示を与えたところ、王はその師僧をパガンへ追放した。そして次にバラモンの占星術師 Zāgraru に求めたところ、彼は王が傘を奉納する時期はいまだ達しておらず、明日の一時^{ひととき}即ち、明朝9時を過ぎた頃に、王はこの世を去られるであろう、と言った。王は立腹して、事実であれば、よし。もしそれが偽りであったなら、汝の家族もろ共に火刑に処するぞ、と云って、時計に注意した。その日の夕方三時^{さんとき}(ビルマでは3時、しかし日本では大体5時半)を打った時、朕には何も起らないではないか」と云うと、バラモンは「時はまだ達していません」と云った。その夜四時^{よんとき}(ビルマの6時、日本の8時半頃)に熱病が襲ってきて、王の容態が突然悪くなり、翌日午前9時を過ぎた時にバラモンの予言通りに王はこの世を去った。

Pin:dalè 王 (1648~1661)

タールン王の死後、その王子ピンダレーが王位に即いた。彼はサガイン地方にンガタツデー(Nga-htat-gyi:)パゴダを建立し、その中に仏の大座像を安置した。この宗教的事業が完成して間もなく、中国の武装兵が現われてビルマを侵略しようとしているという驚くべき情報が中国国境よりビルマの首都に到達した。この中国の行動を理解するために当時の中国における事件に触れる必要がある。

当時、中国では明朝が倒れ、清明がそれに代ろうとしていた頃であった。17世紀の初頭、東満州の一部族から奴爾哈赤(ヌルハチ)が出て、女真族を統一し、汗位に即いた(1616年)。これが清の太祖である。1626年、彼の亡後、その子天聡(太宗)は父の計画を引継ぐことになった。明朝最後の帝である^{ワイスン}毅宗は1643年絶望の末に自殺し、天聡もその後間もなく死去したので、その子^{シユンチ}順治(世祖)が帝王となった。明帝毅宗の子 Yun-li は南京に身を樹てたが、清軍によってそこを追われて、1644年保身の地を求めて雲南にのがれ、数年間はもち耐えたが、1658年再び清軍に敗れた。彼はその一族及び7百の手勢と共にバモーに到り、バモーの土侯を通じて金 100 viss をインワのピンダレー王に献上することによってビルマ居住の許可を得んことを願った。王は彼とその部下たちの武装を解除して、サガインに住むことを許した。

しかし、その結果は中国よりはげしい侵略を蒙ることとなった。それは明朝を支持する中国軍が彼らの指揮者を救助しようとするためであった。彼らは中国の諸州を蹂躪したが、中国の新征服者の基地である満州を掠めることは無益であることを苦い経験によって知っていたので、彼らはもっと安易な獲物を求めようとして南下し、ウエツウインにてビルマ軍を破り、シャン州のヤウンホエ及びモネを占領し、北東より首都インワに迫った。しかし、インワは城壁が堅固であっ

たため、それを奪取することはできなかった。そして、指揮者の一人はポルトガル砲手による一弾に倒れた。その後、3年間ヤウンホエから上ビルマにかけて村々を荒し廻り、民衆、婦女、僧侶等を捕えて虐待し、寺院を破壊して焼払った。また、メティラ地方のウンドウインを占領し、パガンを攻略し、ビルマ軍を撃破してビルマ族の王子数名を捕虜にした。

1661年オランダ側の報告するところでは、彼らの侵略は非常な混乱を引起して、そのためすべての貿易は止まってしまったとのことであった。一時、彼らはチャウセー帯を占拠し、インワでは飢死する者が相繼いだ。

ピンダレー王はマルタバンより3千のタライン兵を召集したが、彼らには戦意なく、途中で脱走した。その脱走の罰として生きながら焼き殺された。彼らの同族は憤慨のあまりマルタバンを焼打ちし、そこにいたビルマ兵を追払い、その家族と共にビルマ人の捕虜6千を連れて、タライン族たちはタイ国に入り込んだ。そしてすでに久しくタイ国に定住していたタライン族Smimにタイ国王は彼らを迎えしめ、11人の将軍にアユティアの王宮にて謁を賜い、彼らに封地を授けた。このような集団移住は1595年頃より始まり、ビルマ王朝の最後まで続いた。その理由としてあげられることはタライン族はすでにその力衰え、到底ビルマ族の報復的侵略に対して抗することができないことを知っていたし、また彼らはビルマにおけるよりもタイ国においての方が一そう好遇されたからであろう。

上ビルマでは米の量が極度に減少し、人々は飢えた。ピンダレー王がデルタ地帯の米をイラワヂ河を通じて容易に手に入れることができなかったことはビルマ族にとっては致命的な打撃であった。というのは、上ビルマの穀倉であるチャウセー帯はすでに中国軍の手中にあったからである。しかし、王は中国軍が我物顔にチャウセの地を跳梁している間、手を拱いて傍観し、作物は種を蒔くことができず、城内の穀倉は缺乏して、兵士や官僚たちは郷里にいる彼らの同族を殺りくする程の有様であった。このように民衆や兵士たちが飢えている一方では王妾や側室たちがあるだけの米を買い占めて、法外な値段でこれを売りさばいた。(ナンダバインの子ミンイエー・チョーゾワの行為を思い起すであろう。) しかも主権者たる王はそれを止めようとしなかった。民衆や兵士たちはこのような食糧の缺乏に苦しむ上に、中国軍によって彼らの家族までが虐待されるのを嘆き、王に訴えたが、王はただ悲しげに自らの無能を告白するのみであった。

インワの弱みにつけ込んで、タイ国軍はペグー及び下ビルマ諸地域を侵略しはじめた。事態はますます深刻化してゆき、遂に宮廷における陰謀はピンダレーを廃することを決定したのである。人々は王のにえきらない態度に我慢しかね、王の弟ピーミンに哀願した。ピーミンは事態の急迫していることを知って、直ちに兵を引きいて王宮に迫った。陣太鼓の音を聞いて王は何事があったかを*宦官たちにうかがわせた。王は事情を知るや、王妃と8才になる王子と4才の孫とを置き去りにして身を隠した。ピーミンと彼の部下たちは宮廷に入り、王を見つけてピーミンは彼に言った。「兄上、私は不正を企んでいるものではありませんが、現在の事情ではこれを見るに忍びません。幾度か大臣高官たちに要求されてきました。今は彼らの言う通りにしなければなりません。」と。すると、王妃は、「あなたが王となられようとも、私たちの命は助けて下さい。私たちは余生を仏道に捧げ、息子たちは僧侶にさせましょう」と云って、ピーミンに歎願した。しか

し、ピーミンは頭を振って、「我々王族の者で比丘となって一生を全うした者がいるでしょうか。彼らは仏門に入ると称して、ただ俗衣を脱いで法衣に変えるだけではありませんか。私は父君に誓った兄弟愛の誓いを思い起こしてあなた方を害する積りはありません」と云って、ピーミンは彼らに一部屋を与え、日々彼らに食物を届けさせた。しかし、数週間後、宮廷人たちは、「天に二つの太陽なし。」(即ち、地に二人の王は存在すべからず)と云う声に対し、ピーミンは遂に王、王妃、王子、王孫をチンドウイン河にて溺死せしめた。この方法は、ハーヴィによれば(P. 120)、インドシナの他の地域においても行われている通り、ビルマにおいても王族を処刑する場合の通例の方法であった。何故ならば人々は王家の血を流すことをためらったからである。他にもいくつかこの場合と似通った例が散見される。

チンドウイン河に彼ら王族を投じた時の王妃の悲痛な様子が、ウ・ボチャ(P. 190)では、次のように述べられている。河岸に彼らを連れて行った時、王妃は、「私の養育した者が私たちをこのように害するとは恩知らずも甚だしいものです。」と云って嘆き悲しんだ。それは王妃がピーミンの養母となって彼を世話したことを意味する。

*ビルマでは、中国その他のアジアの国々におけるほど宦官についての記述は見出し難いけれども、ハーヴィの「ビルマ史」五十嵐智昭氏訳 P. 152 の〔註〕に、「ビルマの宦官は性来の不能力者であって、人工的に去勢は行われなかった」と記されている。恐らく仏教色の濃厚なビルマではそうであったかも知れない。しかし、U On: Shwe の“*Thatpon Abhidhān*, P. 532 には、

မိန်းမစိုးမင်း ။ ။ မိန်းမစိုးမင်းကိုဆုတ်စိုးရသူမေမင်းမေမင်း၊
လက်စွဲတော်တို့နှင့်ခြားနားစေခြင်းငှါ အစိုးလက်တို့ဝတ်ရသည့်၊ ငွေ၊
သင်း၊ ခံရသည့်၊ ငြိမ်းစုံစွဲတို့ဝတ်စားရသည့်။ (၃၀)

(ビルマの宦官はハーレムを取締り、側室たちを監督し、身の飾り物によって他の宮廷人と区別するために袖の短い服を着用し、去勢された者であって、常にむちを手にしていた)と書かれている。

Pyimin: (別名 *Maha Pawara Dhamma Yāza*, 1661~72)

かくして、ピンダレー王の弟ピーミンが即位し後宮の女たちの米の買占めを禁じたので、人々は飢えを凌ぐことができた。しかし、匪賊と化した中国軍の横暴はその後もお数ヶ月続き、マニプール、ジンメ、タヴォイ、マルタバン等を占領し、シリアムやペゲーにも侵入し、財宝をさらって行った。

やがて1662年、清朝の命が降って、雲南の太守 Sankuei は兵2万を引きいて来寇し、マンダレー地方のアウンビンレーに駐軍して軍使をインワに送り、「ユンリを引渡すか、それとも、我が剣を受くるか？」と威嚇した。是非の弁えもなしにユンリの入国を許しておきながら、しかも中国の入寇を撃退するにはあまりにも決断力に欠けていた。ピーミンは会議を開き、席上にて「亡命者を引渡すべきである」と主張したところ、大臣高官たちも王に同意した。ここにビルマ人の日より見主義的な性格の一面がうかがわれる。ユンリがすでに帰順を許された者であるという事実を無視して、彼らはユンリを死地に追いやったのである。ホールによれば(P. 68)、ユンリは雲南に送られ、大衆の前にて絞殺された、とのことである。かくして、インワの勢力はます

ます衰えて行った。ピーミンは仏塔や寺院を建立して、仏教の興隆を図ったが、王位11年にして他界した。

ピンダレー王及びピーミン王に関しては各史家によって少しずつその記述の異っている点、及び、同情と非難との見解があって、概して言えば、ビルマ人史家はやや同情的な見方、英人史家は非難の見方が強いように思われる。いづれにせよ、王としての失政と無能力は免れないが、当時の諸般の情勢やビルマ人の性格等を考慮すれば、同情すべき点もうかがわれる。もし仮に、バイン・ナウンの如き大王であったならば、ハーヴィも指摘している如く（P.118）もっと迅速にその対策を講じたであろうし、ビルマ国内における中国匪賊の跳梁を許さなかったであろう。

ピーミン王の亡後、ミンイェー・チャーティン王（1673～98）は大臣たちの手に委ねられたロボットに過ぎず、サネ王（1698～1714）、タニンガヌ王（1714～33）の三代は、時折叛乱や辺境の地における外寇はあったが、概して泰平無事の世であった。

外国貿易について

この時代におけるビルマの外国貿易にふれる必要があると思う。ミンイェー・チャーティン王は関税収入を必要とし、また外国貿易によって国民の利益を増進せんことを願っていた。1627年頃オランダ、イギリス両国の東インド会社はビルマに支店を設けた。オランダはシリアム、ペゲー及びインワにその支店をもち、イギリスはシリアムにもった。両会社はもっと豊かな地、即ちオランダは香料諸島に、またイギリスはインドに、それぞれ植民地をもっていたから、ビルマの支店はいづれも小規模のもので、小商人の手に委ねられていた。その上、不安定なビルマの国情の下では堅実な貿易が不可能であったためにこれらの支店もしばしば閉鎖されねばならなかった。殊にオランダは彼らの貿易に定められた規則に関して王と言い争った結果、ビルマとの貿易には利益のないことを最終的に決定して1679年工場を閉鎖してしまった。

そこで、イギリス東インド会社は再びビルマとの貿易に幾分の関心を示しはじめ、Cromwellの時代に放棄していた工場の再開のため交渉を始めた。イギリスはインドの植民地に防備を固め、火薬製造のために必要な硝石を要求した。その上、東洋にいたヨーロッパ人たちはビルマが豊かな*チーク樹の森林を所有していることを知ることになった。

*チーク材は当時の木造船を造るための最上の用材とされていた。

コロマンデル海岸にある彼らの貿易所は個々の商人を通じてチーク材の委託輸入を行っていた。そして、それらの商人はシリアムにて船積した。しかしながら、数年間に渡る取止めのない交渉の結果、東インド会社はその工場を再開しないことに決定した。王は貿易協定に対する提案に回避的な返答をして、硝石の取引には絶対に反対的な態度を表明した。またすでにオランダに対してもビルマにおいて火薬製造の許可を与えさせようとする強い圧迫に王は抵抗した。結局イギリスは彼らが必要とするすべてのビルマ製品は個々の商人の操作によって得ることができるという結論に達した。そして、マドラスではシリアムへ貿易のため航行するヨーロッパ人に特別な許可を出すことにした。このようにして活発な貿易が二つの港、即ち、マドラスとシリアム間

に行われた。

イギリスが再びビルマに関心を示しはじめたのは1680年、即ちオランダがビルマより撤退した翌年であった。しかし、その関心はオランダとの競争が除去されたことがその主な原因ではなかった。真の原因はフランスのルイ14世がタイ国に対する支配権を得んとする意図を表わしていたことであった。

ビルマにおける最初の失敗の後、東インド会社はその利権をタイ国に譲渡し、1661年タイ国にて工場を開設した。タイ国はビルマよりもはるかによい貿易条件を提供した。しかし、1680年にはフランス勢力の影響と野心家の大臣 *Constant Phaulkon の敵意のために、アユタヤーにあったイギリス工場は不運に見舞われた。かくしてオランダのビルマよりの撤退はイギリスがタイ国において失敗したその均勢として、インワとの関係を回復する機会をイギリスに与えた。

*吉川利治氏「タイ国概略」P.50によれば、ギリシア人の船員 Phaulkon はアユタヤーに来て通訳をしていたが、次第に地位を得て王室貿易の主務官となるに至りオークヤー・ウィチャイジエンなる名と爵を賜わり総理大臣になった。彼がアユタヤーでめとった妻は日本人である。フォールコンはフランスに協力し王に改宗をすすめたが、カトリックの布教が余り露骨となるに及んで仏教徒の反感を買い逆効果になった。1688年王が重病となるやオークプラ・ペットラーチャーはフォールコンや王位をねらっていたキリスト教徒たちを殺しフランス兵も国外へ追放した。

シリアムにあった古い工場の再開によっては何の利益も得られないことが明白になった時、即ち1686年に新しい計画がマドラスの議会に提出された。それはイラワヂ河のデルタ地帯より最西南端に沿ったバセイン河口内にある Negrais 島を強奪するという計画に外ならなかった。厳密に言えば、その計画はビルマとの交渉とは何の関係もなかった。それはタイ国に対する報復的強奪政策の一部を成していた。それに東インド会社は多数のイギリス人反逆者の海賊的行為によって刺戟されたのであった。そして彼らは根拠地として *Mergui 港を使用した。東インド会社はベンガル湾の東岸にそこからマーギイや*テナセリムの地域にある他の海賊根拠地を威嚇することができる安全な港を必要とした。

*当時 Mergui (ビルマ名 Myeit) はイギリス人に Mergen として知られ、その後1825~1948年までイギリスの所有地となった。("Siamese White" by Maurice Collis, P.17)

*現在の Tenasserim も当時 Tenasary の名のもとにタイ国沿岸を含め、その地域一帯の地名であった。(Ibid, P.31)

もしフランスがタイ国に対する政治的支配を達成するとすれば、当時その可能性も認められたが、そうだとすればこのような地域の戦略的価値は更に高まるかも知れなかった。しかし、マドラスの議会は、その問題が討議された時に、その島はビルマではなく、アラカンに属しているものと思っていた。

その計画は実行されず、中止となった。というのは、季節風の変化がビルマ沿岸への航行を不可能にするまでに、遠征隊は出発の準備に間に合わなかったからである。しかしながら、その知らせはマーギイにいた *Samuel White の耳に達し、彼はその危急を知らされたので少数のタイ国軍を引いて、その島を占領した。しかし Constant Phaulkon は直ちにこの無謀な行為を取消すように反対命令を出したので、1687年の初め頃にタイ国軍は撤退した。

*“Siamese White”として知られる Samuel White という人物はその著者 Maurice Collis が「真実は小説よりも奇なり」という言葉を最も適当に表わした例であって、James II の時代にタイ国王によってその国の高官に任じられ、海賊的行為によって巨万の富を蓄積し、それによって権力をほしいままにしたと云われる。故に彼は ‘a great Interloper and a great Enemy of the Kingdom’ という名を東インド会社によって刻印を押された。

一方では、ロンドンにおける当会社の重役たちは James II を説き伏せてマーギイにいるイギリス人に私書を送らせ、maréchal Des Farges の下にあるタイ国ヘレイ14世が軍隊と技術兵を派遣したことに対する反撃としてイギリスのフリゲート艦へ港を明渡すべきことを提案した。この計画も失敗した。その書信が到着しないうちに、マーギイのタイ国人たちは立ち上り、その地域のすべてのイギリス人を虐殺した。生き残った者の一人で、Curtana 号の船長 *Anthony Weltden は Negrais 島に逃れた。

*Captain Weltden, Constant Phaulkon, Davenport 等については “Siamese White” by Maurice Collis に興味深く記されている。

東インド会社はムガル大王 Aurangzeb との争いに巻き込まれるようになったので、ベンガル湾を越えて海軍要港を開設せんとする計画にそれ以上注意を払うだけの余裕はなくなった。そしてまた、やがてタイ国におけるフランスの政策が余りにも策に溺れたことが明らかになったので、も早やこのような要港の必要もなくなった。

シリামの工場を再開しないという会社側の決定はインワの宮廷を失望させた。そこでビルマは会社に工場を再開せざるを得ないように仕向けようとしてビルマ人はマドラスのアルメニア人の商人と彼の船を拿捕し、天候の急変のため無理にマルタバンの港に入らしめた。運よく、船荷の一部分はマドラスの太守 National Higginson に属していたが、彼はそれ故捕虜になった商人と彼の所有物の釈放を要求するために使者を送らねばならなかった。さて Higginson は彼が公式の貿易関係が設立されることを約束できれば、その時には彼の要求が入れられるであろうということを十分に認識した。そこで、彼は使節団を公のものとして通すために全力を尽し、その目的を以て東インド会社によってそれを送った。しかし、それは公のものとは認められなかった。その仕事を委されていた Edward Fleetwood 自身は個人商人であって、会社の官吏ではなかった、そしてその諸費用は Higginson 自身のポケットより支払われていた。

インワの宮廷ではどこかに策略があるのではないかと疑った。ビルマはシリামの工場が公式に再開されるよう強く主張した。結局東インド会社は正式に任命された長の責任のもとでそこで造船のドックを設けることを取り決めた。だが、困ったことには会社がその投機事業を公式に行おうとはしなかった。ヒギンソンはその事業を引受けるために小規模な個人企業組合を形成しようとしたが、支持を得ることができなかった。そこで遂に彼はシリামへ交易に行くマドラスの商人たちの間より長を任命し、彼に一斉の権根を与えることによってその問題を解決した。英帝国の国事をあづかる長官は会社の旧工場の場所をその本部として引継ぎ、イギリスの旗をかかげる権根を与えられていた。実際には彼はマドラスにおける個人の造船工であり、毎年9月にマドラスの船荷主と共に出かけ、翌年3月に彼らと一緒に帰ってきた。

この協定は1720年まで続いたが、長であった George Heron がある殺人事件に巻き込まれるようになった結果として正式の駐在官によって取って代えられた。その新任の高官は個人契約者であって、マドラス議会へ保証金として多額の金を即金にて支払い、ずっとシリアムに住みつき、会社のために船舶の建造と修理を引受けねばならなかった。1689年以後フランス人はシリアムに小さな支店をもった。当時ヨーロッパでは造船術にかけてはフランスが最も優れ、デルタ地帯の人々にその技術を教えた。フランス人とイギリス人は共に多くの船舶を造った。彼らが好んだのは50トンの二檣帆船であった。その仕事は4, 5人の白人請負業者の下にタライン族やビルマ族の船大工によって為されたもので、その出来栄もよかった。そして、船の買手は回教王やインドの商人であった。造船はそれ以後デルタ地方の殷賑工業となり、シリアムは1756年まで、またラングーンは1830年頃まで、東方における造船業の中心地であった。

両国の会社ともビルマのチーク材の貿易に益々関心を持つようになって、彼らの海軍力の競争が展開されるにつれて、シリアムは戦略的予測を始めた。しかしながら、その試みは失敗であった。その事業の遂行はまづく、費用が高くつき、1740年にはモン族の大暴動がはじまって、マドラス議会はその造船注文をボンベイにあるより能率的なペルシア系のゾロアスター教徒の造船場へ移すことに決めた。1743年にはモン族はイギリス人の工場を焼き払い、そして最後の駐在官 Jonathan Smart は撤退した。

インワ王朝の滅亡

これらの年月の間、インワ王朝は3名の劣勢な王、即ち Sane (1698~1714), Taninganwe (1714~33), Maha Dhammayāza Dipati (1733~52) によって統治されていた。1635年にインワへ遷都して以来ずっと宮廷の雰囲気はより閉鎖的になり、その前途の見通しは制限されるに至った。王が首都を離れることはめったになく、ハーレム生活の嫉妬と陰謀とに取囲まれ、事実上宮廷の囚人に等しいものであった。正妃は王の異母姉妹であるべきことが因習によって規定づけられていた。彼らの子たちは下位の女王の子たちと共に幾十人を数えるが、彼らの父王が亡くなった時には王位を求めて死に物狂いの奪い合いが起ることは必然であって、その結果として王位継承の候補者は危険な血の浴場に置かれるという事実を予想するような恐怖のうちに生活したのである。

その頃、インワがその領土に対してどれ程の実際の支配力をもっていたかは確実ではない。ビルマ国は幾つかの属領に分けられ、その多くは王族たちによって保持されていた。彼らの間からは、権力を握ろうとして周囲に集る無法分子を糾合しようとする王位篡奪者がいつ^{なんどき}何時現われるかも知れなかった。たとえ成功しなくても大ていの場合、彼らは強奪によって地方の住民を恐怖におとし入れた。タウングー王朝後期のこれらの王たちがイラワヂ河の主要交通路に当るベグーの町やシリアムの港より遠ざかった下ビルマに対して支配力をもっていたかどうかは疑問である。

この百年間、デルタ地帯が平穏のうちに過ぎたのは、モン族がバイン・ナウン王時代の戦乱に

よって引起こされた人口の減少を回復するために相当の年限を要したからであった。しかし、今や彼らがその勢力を挽回し、荒廃した地域に人口を回復するや形勢は再び嶮悪となり、またインワ王朝の弱体が明白となるや、モン族がペグーの旧王国復活を夢見る時が必然的に来たらんとしていた。

インワの完全な弱体をさらけ出していたのはチンドウ イン河の向う側のマニプールの山国地方であった。騎馬の名手を誇るこの王国は、その国技が*馬上打球戯であったが、16世紀にバインナウン王によって約30年間ビルマの朝貢国とされていた。

*この馬上打球戯はビルマにおける競馬の濫觴となったものである。

後、その国が独立を回復して、時折ビルマの辺境を侵した。その王 Gharib Newaz (1714~54) の治下において、その侵略は長期に、そして、広範囲にわたった。

マニプール人はヒンドウイズムに改宗し、イラワヂ河にて水浴することによって祝福を求めるようにバラモンたちによって扇動された。そして、上チンドウイン河沿いに配置されていたビルマ守備隊は彼らを阻止することができなかった。

1738年、彼らはインワ都城下の人家や僧院をすべて焼き払い、カウナムドー・パゴダの防柵に殺到して、ビルマ守備兵を牛舎につながれた牛を屠殺する如くに殺し、枢府(Hluttaw)の大臣もその兇刃に倒れた。そのパゴダの東門の扉にはガリブ・ネワズ侵略の際の刀痕が残っている。(ウ・ボチャ、P. 191)

1794年には国内の蹂躪はますますはげしく、ガリブ・ネワズはインワに迫り、財宝・家畜及び数千の住民を奪い去り、指揮官を含むビルマ兵の3分の2を虐殺した。

マニプール軍も時にはビルマ軍によって悩まされたが、大ていの場合、彼らが勝利を得た。彼らは辺境の幽谷に住んでいたので、外界の事情に通じず、自ら英雄を気取って、ビルマ如きはいつでも彼らの意のままに為し得ると妄想していた。彼らは、ビルマが数倍の大国であることを知らず、彼ら自身が恐るべき復讐の種子を蒔きつつあることを覺らなかつた。従って、ビルマ族の復讐は絶対あり得ないように彼らに思えた理由は偶然当時のビルマが無能な王の統治下にあったからである。この王は飲食に興じて、国の統治を怠たり、国状は悪化して行つた。

ビルマ王マハー・ダンマヤーザ・ディパティは彼の部将たちがマニプール軍を撃退できなかった時には、はげしく憤り、その都度、彼らのくびに剣をつきつけて炎天下に曝して、次のように言うのが常であった。「もしこのような失敗が再び我が耳に入るなら、この剣にて汝らを成敗するであろう。」と。もちろん1648年以来、王も彼の先王たちも自ら出陣はしなかつた。

ビルマ王国の運命も今や熟し切った果実の如く、少しでも触れれば落ちるような累卵の危きにあった。王位を主張する者が続出してきた。流賊は諸方にはびこり始めた。マンダレー地方には、Okpo (オッポ) のシャン族の植民地で、昔ケントウンに近い Mong Kwi から追放された者たち、即ち Gwe Shans (グウェ・シャン族) が附近のマダヤーにて反乱を起し、防柵を構え、同地方に勢力を専らにして、彼らの思うがままに略奪を行なつた。一般の人々は平和を求めてアラカンへ移住しはじめた。

Hall (P. 75) によれば、彼らグウェ・シャン族が反乱を起しはじめたのは1740年であって、そのきっかけは彼らのびんろうじに課せられた法外な税に対する不満であった。そこで彼らは Gonna-ein の指揮の下に、下ビルマを追われてマダヤーに定住していたモン族の一団と結託して、その地方よりビルマ人を追払った。

それとほとんど時を同じうして下ビルマでは老婆の織機にさえ税が課せられるほどの苛斂誅求を憤ったモン族たちは団結して立ちあがり、ペゲー、シリアム、マルタバン等にてビルマ族を虐殺し、ペゲーにて、Smim Htaw Buddhaketi を彼らの王として正式の座に就かせ、1740年モン族は独立を宣言した。

1743年事態は急変した。ビルマ軍はモン王国の中心部を襲い、シリアムを占領した。3日間の略奪が続き、その町のポルトガル人、アルメニア人、フランス人等の教会を焼き払い、イギリスの工場を除く外国商人のすべての倉庫を破壊した。イギリスの工場は少数のインド軍の土民兵によって救われたらしい。しかし、モン軍も、ビルマ軍が略奪によって風紀を取乱し、酒飲に溺れている隙をついて反撃し、町を奪回した。

イギリス駐在官 Jonathan Smart が中立的態度を取ったことはビルマ軍に対する同情の故として解された。結局彼は屈服することを余儀なくされ、工場は焼かれた。彼は彼の一行と共にそれ以上の妨害を加えられないでマドラスへ引上げることが許された。

*Smim Htaw Buddhaketi はインワのビルマ王の縁者に当るのであるが、ペゲーにて王座に即くまでは不遇の身を僧衣に包んでいたのである。

*ビルマ名は Thā-hla と呼び、Gwe-min: Thamein Htaw の号を与えられていた。サネ王の甥に当る。
(U Hpō: Kyā:, P. 192)

彼はモン族の支配者とはなかったが、実際のところ彼の養父であった Binnya Dala (1747~57) のあやつり人形に過ぎなかった。スミム・トー・ブッダケティは王としてふさわしい者であることを証明するためには白象を得ることが必要であった。そして、彼は白象を求めてジャングルの中に長く月日を過ごし、国政を顧みようとしなかったので、1747年大臣たちは彼の代りにビンニャ・ダラを王位に即けた。そして彼の下にモン族はインワの弱体につけこみ、プローム及びタウングー以南の全地域を占め、イラワヂ河沿いにインワに攻め上った。しかし、インワの城壁は強固であったので、モン軍はそれを陥し入れることはできなかった。ビルマ軍もほとんど敗走するばかりであった。

多年に渡るモン族の侵入は上ビルマの農業を疲弊させた。農民は敢て田を耕さず、たとえ耕したとしても、農作物は流賊によって焼き払われた。王宮の米倉を補給していた最後の望みも、モン族がチャウセの水道を占領するに及んで、断たれた。彼らはインワを包囲した。数ヶ月の包囲の後、インワは餓死し、1752年4月モン軍の一縦隊はインワ城内に雪崩れ込んで、これを焼き払った。モン軍は強固な守備隊をそこに残して、王及び王族を捕虜としてハンタワディへ連れ去った。従って王の本名が Mahā Dhammayāza Dipati であったが、その別名 Hanthāwadi Pāmin: (「ハンタワディへ連れ去られた王」の意) の方が一般によく知られ、もう一つの別名 Kyadaba-dē: min: と呼ばれた。

この王を最後としてニャウンヤン王家は亡び、第二次ビルマ王国もそれと共に全く失墜してしまった。

第一次インワ王朝の創設者タドーミンビヤーから数えて21代目に当るニャウンヤン・ミンタヤーより29代目のマハーダンマヤーザ・ディパティ（即ち、ハントワディ・パーミン）までをニャウンヤン王家と呼ぶ。それらの王の名は次の通りである。

- 21 代 Nyaung: Yan: Min: Tayā: (1597～1605)
- 22 代 Mahā Dhammayāza (即ち, Anaukpetlun:, 1605～1628)
- 23 代 Thālun-min: (1629～1648)
- 24 代 Pin: dalè (1648～1661)
- 25 代 Pyi-min: (1661～1672)
- 26 代 Min: yè Kyaw-htin (1673～1698)
- 27 代 Sane-min: (1698～1714)
- 28 代 Tanin-ga-nwe (1714～1733)
- 29 代 Mahā Dhammayāzā Dhipati (即ち, Hanthāwadi Pāmin:, 1733～1752)

ニャウンヤン王朝時代の文学について

当時のビルマ文学について触れておこう。1597年に、ニャウンヤン・ミンタヤーは再びインワを修復し、第二次インワ王朝を建設したが、王はかつてのインワ文学の蘇生を夢み、その実現のためにタウンゲーから詩人たちを招聘した。そして、約150年間続いたニャウンヤン王朝時代には多くの秀れた詩人、散文家が輩出し、第一次インワ時代に次いで再びビルマ文学の開花期を迎え、近代ビルマ文学へ強い影響を与えた。この時代には幾多の*各種の詩が書かれたが、もう一つの特徴は散文学が生れたことであって、ビルマ文学史上 Sagā: Pye Khit (散文学時代) と云われている。

*ビルマ詩については学報25号15, 16頁参照。

先づこの時代を代表する4人の僧詩人の名は、

- (1) Aggawantha Sayadaw
- (2) Ariyāwantha Sayadaw
- (3) Thinganātha Sayadaw
- (4) Taungbilā Sayadaw

であるが、その他にも秀れた詩人、散文家が続出した。その主な作者、作品、業績等について簡単に述べる。

Taungbilā Sayādaw アナウベツルン王の時代の人で、“Wetthandayā-pyo”の作者。

Thinganāhta Sayādaw アナウベツルン王の時代に有名な“Maṇikuṇḍala Wutthu”と題する散文小説を書いた。

Mahā Yatanākara Sayādaw ミンイエー・チョーティン王の時代、仏教に関する物語で“Yatanākara Wutthu”を書いた。

Padethayāza サネ王に仕えた大臣であったが、宮廷詩人としてヤドウ、ピョー、エーデン、演劇詩等無数の詩を書いた。ビルマ文学史上一流の詩人に属し、タニンガヌエ王の時代に至るまで絶えず詩を書き続けた革命的な詩人である。王の作品中有名なピョー詩は“Thūzā-pyō”, “Maṇiket-pyō”, “Kummābaya-pyō”, “Hsanna-pyō”, “Yō: dyā: than-yauk-pyō”, “Manaw-pyō” 等である。また、彼のエーデン詩としては“Hteik ū: tin-ēgyin:”, “Hteik-ū: ne-ēgyin:”, “Sagu-min: -ēgyin:”, “Salin: min: -ēgyin:” 等が知られている。

殊に彼の“Maṇiket Pyazat”はビルマ演劇としては最初のものであって、その後ミンドン王時代の作者たちに多大の影響を与えていると云われている。彼の詩や劇に用いられている“Maṇiket”という語はMaṇikkha（パーリ語）のビルマ語化されたものであって、maṇika＝「ルビーに似た」+akkha＝「眼」即ち、「ルビーのような眼をもった(馬)」を意味し、仮空の馬の名前である。

従来の物語作者が仏陀の教えを基礎として、Nibhatkhinを資料としたが、パデターザーはその伝統の古い殻を打破し、新作風を推敲した。従って「仏法の教え」を「嫁探し」風な作品に置換えた。彼が書いた“Maṇiket Nan: dwin: Wutthudawgyi:”は近代演劇を生み出す先駆をなし、また、彼が植えた種子が現代小説にも影響を及ぼしている。その作品(Maṇiket Nan: dwin: Wutthudawgyi:)は1698年を過ぎた頃に書かれたものである。

Nat-shin Naung 上述したアナウペツルン王の兄で、タウンゲーの太守となり、デ・ブリーと血盟を結び、最後にはアナウペツルン王にデ・ブリーと共に処刑された人であるが、ヤドウ詩人としても有名である。その作品の中で、“Hpayā: daing-yadu”, “Sit-hkyi-yadu”, “Mō: taw-yadu”, “Htō: gwin:hpwē-yadu”, “Gūlithabin hpwē-yadu”等がよく知られていて、彼のヤドウ詩が他のヤドウ詩人のものと異なる点、特にナワデーと比較されることがしばしばあるが、仏教に関するものよりも恋愛を扱ったものが多いことに特徴がある。

Min: Zeye Yandameit アナウペツルン王の時代に大臣となり、“Min: yēnayā-ēgyin:”, “Hpon: hton: pabsindaw-mawgun”, 及びその他ヤドウ詩をも書いた。

Shin Than Kho Hlawkā: thon: htaung hmū: の孫であり、ミンゼヤ・ヤンダメイの甥に当る。代々の詩才を受継いでいた。12才の頃より詩作をはじめ、ナッシンナウンをその師として、彼亡き後、ヤドウ詩人として有名になった。その恋愛を扱った詩ではナッシン・ナウンの影響を受けているが、パゴダ由来記その他仏教に関する詩では*Nawadē: に影響されているようである。アナウペツルン王に献上した“Hpon: daw hpwē-yadu”, 及び彼の生命をも危くしたことのある“Thālwut-htwet tin hkyi-yadu”が最もよく知られている。また、モーグン詩も幾つか書いている。

*Nawadē: については学報28号80頁に。

Shin Karawika タールン王の時代、ヤドウ、ピヨー、モーゲン等の詩を書いた。その中主なるものは “Narapati-yelā: paiksun-yadu”, “Min: hlayinnu-pyō”, “Min: yè kyawzwā-lē: htat kyaung: ti-mawgun:” 等を書いて大いに王の称讃を得た。

U Kala タニンガヌエ王時代の歴史家。彼には Mahā Yāzawingyi: (大年代記), Yāzawinlat (中年代記), Yāzawingyok (要約年代記) の著がある。モーゲン、エーデン等詩、仏塔由来記、碑銘、パーリ語による仏典註釈書等多数の文献を資料として編纂したと云われている。Mahā Yāzawingyi: はその後19世紀バヂドー王の時代に編纂される Hmannan: Yāzawin の先駆をなしているものである。ウ・カラの文章は簡潔荘重、ビルマ散文文学の金字塔と言い得るであろう。その後、散文文学は彼の散文を模範として発達してゆくのである。

終 り に

第一次、第二次インワ朝、その間幾年間かの空白時期はあったが、約400年間近く（より正確には387年間）も続いたビルマ王家が終にはモン族の襲撃によって滅亡に至ったことは、恰かもモン族がビルマ族に対して主客転倒を演じたかの如く思われた。各地に分遣隊が派遣され、ビンニヤ・ダラの弟で、その王位継承者はすべての抵抗が終ったものと考えたにちがいがなかった。彼の指揮官 Talaban の下に守備隊を残して彼の本隊を船にて輸送せんと準備を整えた。そして、帰国の途につこうとしている矢先に、インワの北約40マイルの所にある *Moksobo・myō (現在の Shwebo) の町の忠誠を要求するために送られた分遣隊の一隊がその住民によってせん滅されたというモン軍にとっては不愉快なニュースが伝えられた。ビンニヤ・ダラはその事件の性質をもっと綿密に調べるべきであったが、それを取るに足らないものとして扱ったところに彼は致命的な誤ちを犯していた。その地方の住民を見せしめにせよとタラバンへ最後の命令を出して、彼は軍隊を引上げて帰国した。モン軍がペゲーへ引きあげたのはタイ国よりの侵略を恐れていたからであり、また彼らがインワ以北に進攻しなかったのは兵力が十分でなかったからであったと推察される。

モン族にとって不運だったことは、ムソボミョー住民の反抗はビルマ民族主義運動の発端であって、ペゲー王国を完全に破壊するに至るのである。そして、反抗分子を組織したその地域の長はビルマ史においてアノーヤター、タビン・シュエティと並ぶビルマ三大英傑の一人となる人物であった。

*Moksobomyo = “the town of the hunter chief” の意。

(つづく)

参 考 文 献

- U Hpō:Kyā: : Myanmā Yāzawin Akyin: (1937)
U Tin U : Myanmā Naing-ngandaw Thamaing: Sanpya (1957)
U On Maung : Myanmā Yāzawin hit (1953)
U Min Han : Myanmā Naing-ngandaw Hket-laik Yāzawin (1937)
D. G. E. Hall : Burma (1950)
G. E. Harvey : Outside of Burmese History (1947)
著者不明 : A Guide to the History of Burma.
ハーヴィ著・五十嵐智昭訳 : ビルマ史 (1943)
アーサー・フェアー著・岡村武雄訳 : ビルマ史 (昭18)
U Pe Maung Tin : Myanma Sāpe Thamaing : (1955)
Daw Si Si : Yatanābon Wutthu Nidān:
Г. П. ПОПОВ : Бирманская Литература, МОСКВА (1967)
Maurice Collis : Siamese White (1935)
吉川利治著 : タイ国概説 (1966)
荻原弘明著 : ビルマの年代記について (歴史教育12の12)
荻原弘明著 : 東南アジア歴史と民族 No. 1 (1971)
U On: Shwe : That-pon Abhidhān (1956)
U Tin Swe : Porāna Kahtā Abhidhān (1954)
Judson : Bur-Eng Dict (1953)
W. S. Cornyn and J. K. Musgrave : Burmese Glossary (1958)
U Maung Gyī: : Pāli Abhidhān-hkyot
水野弘元著 : パーリ語辞典